

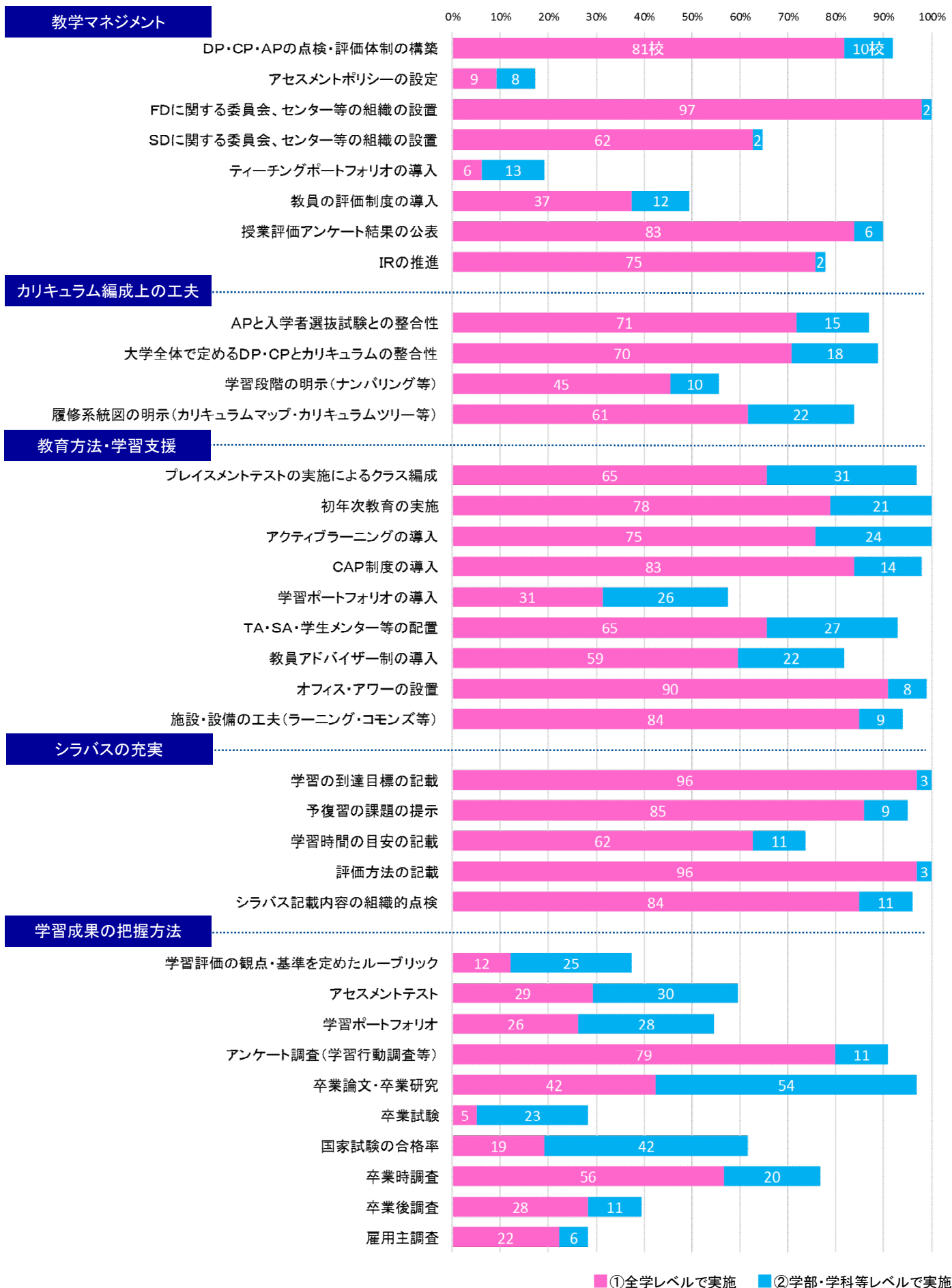
私立大学における 教育の質向上に関する 取り組み — 提言と新たな課題 —

平成31(2019)年3月

一般社団法人日本私立大学連盟
教育研究委員会



私立大学における教育の質向上に関する取り組み状況



■①全学レベルで実施 ■②学部・学科等レベルで実施

私立大学における教育の質向上に関する取り組み事例

多面的評価による「学びと成長調査」 立命館大学

全学で育成を目指す学生の「学び」と「成長」を
統一した設問項目で可視化
客観的データと組み合わせて分析・公表・活用

ポイント1: 設問項目

- (1) DPの達成度
学生が卒業までに修得することを求められている知識・技能・態度の達成度
- (2) 学習機会
専門分野、双方向性、キャリア形成、授業外学習への寄与に関わる授業経験
- (3) 学習過程
勤勉的学習・主体的学習・協同的学習
- (4) 学習成果
専門的素養、グローバル化に関わる能力、課題解決能力、他者との協働、コンピューター・リテラシー、自己理解・キャリア形成
- (5) 満足度・意欲等
正課・正課外のそれぞれの満足度と意欲

ポイント2: 客観的データと組み合わせて分析、結果を公表

主観的データである「学びと成長調査」と客観的データを組み合わせて分析・検証、結果を公表することで、社会への説明責任を遂行

ポイント3: 第3期認証評価への活用

自己点検・評価において、学習成果の検証の中心的な根拠資料として活用

今後の展望

高等学校教育における学習成果との連結など

「ルーブリック」や指標を活用した学修成果の可視化 関西大学

大学が目指す考動力(自らの頭で自主的によく考え、自律的・積極的に行動する力)あふれる人材育成を可視化

ポイント1: DPIに関連づいた「考動力コンピテンシー」と

「関西大学ベンチマーク」

「考動力コンピテンシー」や「関西大学ベンチマーク」の活用を通じて、初年次教育と専門教育(ゼミ等)を有機的に接続するプラットフォームを構築

ポイント2: ルーブリックの周知・活用を推奨

- ・日常的なFD機会の活用、『ルーブリックの使い方ガイド』(教員用・学生用)の作成等により、ルーブリック活用の意義を教職員・学生に周知
- ・2015年度授業活用数 60→2017年度 208に増加
- ・学生同士の相互評価への活用も推奨

ポイント3: 直接評価・間接評価を組み合わせて分析

結果を内部質保証に活用

「学士課程教育ごと」「全学」のアセスメント・プランを定め、直接評価(GPA、外部試験結果、単位数等)と間接評価(「考動力コンピテンシー」を基盤とした学習到達度等の調査)を組み合わせた分析結果をフィードバック、教育改革を促す内部質保証に寄与

今後の展望

教育の現状に適した共通ルーブリックを開発し、大学全体の教育の質保証に活用

専門性を持つ教養人を育む「リベラルアーツ教育」 東京女子大学

21世紀の日本と国際社会における人物育成に不可欠な
リベラル・アーツ教育の学修成果の可視化

ポイント1: 「文理融合」や「分野横断」型の科目群を

全学共通教育に設置

文理融合や分野横断型の科目群を全学共通教育に設置し、どの学科・専攻に在籍していても、入学から卒業までの学修を通じてリベラル・アーツ教育の学びのあり方を実感できる制度を整備

ポイント2: 学びの項目を可視化し、自主的な学びを促進

自主的な学びを構築するために、ナンバリングやカリキュラム・マップの策定、多様な履修モデルで提示し、履修指導を徹底

ポイント3: 長期にわたる教育成果の測定・検証

在学中の各種測定・検証結果だけでなく、「卒業生アンケート」も組み合わせ、長期的な教育成果の測定・検証を実現し、教育改善に活用

今後の展望

学修成果の可視化をめぐるアセスメント・モデルの改良
教育課程の精度と客観性の向上 など

教育改革に活かす「卒業生アンケート」 國學院大学

卒業生アンケート結果を英語教育改革に反映

ポイント1: 卒業生アンケートが目指すもの

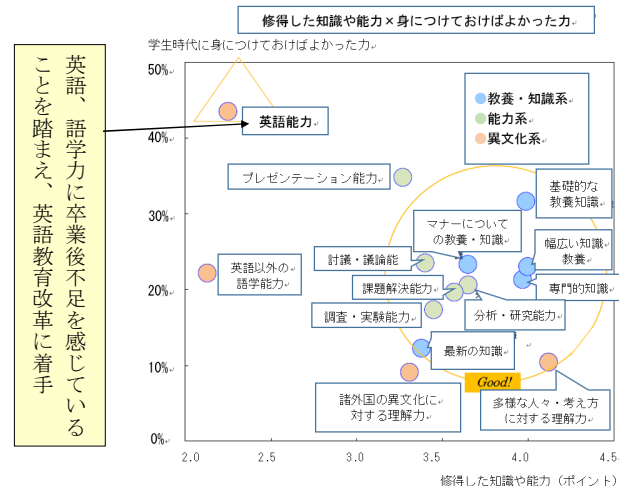
平成28年度から、卒業後3年・5年・10年を経た卒業生を対象に、在学中に身につけ、今役立っている、身につけておけばよかったと思う能力や資質などを質問するアンケートを実施
学生時代の経験と職業生活の関連性を探り、共通教育プログラムや各学部のカリキュラムの見直し・改善に活用

ポイント2: 卒業生アンケート結果の共有・活用

アンケート結果を学部長会及び学部教授会、事務局の部課長会議などで報告し、報告書を電子データで共有
2年連続で「大学時代に身につけておけばよかった力」の筆頭に英語力が挙がったため、英語教育の改革に着手し、教育活動改善に活用

今後の展望

学科別卒業率や退学率等についてもデータを蓄積し、分析結果を踏まえた16年間の地道な取り組みの結果、退学率を半減
これらの実績も踏まえ、毎年の点検と長期的な評価・検証を組み合わせた重層的な取り組みの継続



事例の詳細については、「私立大学における教育の質向上に関する取り組み～学修成果の可視化による大学教育の質保証～」をご覧ください。
 (日本私立大学連盟WEBサイト: <http://www.shidairen.or.jp/>)

提言

第4の方針としての アセスメント・ポリシーの策定

3つの方針の実質化が大学教育の質保証のもっとも重要な課題となっている。3つの方針が実質化しているかどうかは、「教員が何を教えたか」ではなく「学生が何を学んだか」という観点から検証しなければならない。そのためには、まず、学習成果をどのように組織的に把握しているかということが各大学に問われている。

そこで、第4の方針として、アセスメント・ポリシーを策定することを提言する。アセスメント・ポリシーとは、学習成果の評価方法を明文化することで、多くの大学で策定に向けての取り組みが始まったばかりである。評価方法については、色々なものがあるが、大学教育の多様性を発展させるという私立大学の使命を実質化するための方策として、個性豊かな建学の精神にふさわしいアセスメント・ポリシーが策定されることを期待する。

新たな課題

課題1 スピード感あふれる適切な入試改革

「入試改革元年」を告げる2021年度入試まで残すところ2年弱となり、私立大学の迅速な入試改革情報の公表が社会から強く求められている。80%以上の大学生が学ぶ私立大学こそ、率先して教育的に見識ある基本方針を発信し、高校生が安心して学習に専念できる環境作りには貢献しなければならない。高大接続の改善なども視野に入れながら、明快な入試改革情報の公表にすみやかに取り組む必要がある。

課題2 超スマート社会における人間教育の推進

若者の全人格的成長を何よりも願ってきた私立大学にとって、学生の知識・技能だけでなく、主体性・協働性を含む学力の3要素を、入口から出口までバランスよく測定することがこれまで以上に強く求められている。開発が順調に進むJapan e-Portfolioなどの新たなツールを使って、超スマート社会の中でも、若者の豊かな人間性の育成を目指し続ける必要がある。

加盟大学の事例からみた教育の質向上のためのPDCAサイクル

